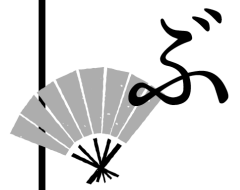


古典落語



学



落語家

立川談四楼

第二十三回 太陽月雷

落

語と講談はどう違うの？ そんな質問がよくあります。

「セリフと地の文章の多さの違い」と答えます。小説を例にとります。小説はカギカッコでくくられるセリフと、カギカッコのない地の文章で成り立っていますね。そのセリフ中心が落語で、地の文章が多いのが講談と言えるのです。

講談が「それから早三年の月日が流れ……」とやると、落語はその部分をセリフで表現します。「久しぶりだな」「三年ぶりじゃねえか」と、会話でそれを分かってもらうのです。

「隠居が家におりますと、そこへ大工の八五郎がやってまいります」。それが講談だとすると、落語は「(こ)んちは、ご隠居

いる？」「誰かと思ったら八つつあんじゃないか。まあお上がりよ」となるわけです。セリフと地の文章の違いがお分かりになったでしょうか。

落語の登場人物はとにかくよく喋ります。侍、お百姓、職人、商人。みなよく喋り、いちいち職業を言わなくても喋っている内容から分かるように作られています。威勢がよくって「何をぬかしやんでえ、べらぼうめ」なら職人ですし、「許せよ」「いらっしやいませ。何を求め」でとくれば、店に入ってきたお侍を商人が迎えているわけで、挨拶だけで職業が分かるのです。

襟元を合わせるときに小指を少し立てると娘さんに見えますし、両の手の平を胸にあてがい顎を前に出すと、これはお婆さんです。杖を突き頭を少し落とすと、そうです、これはお爺さんです。「あたいはねえ」と言わせれば与太郎ですし、「これ、珍念や」と言うのは間違いなくお尚さんです。

のように落語は説明をせずに、ちょっとした目や指先の動き、つまり仕草でどういう人物かを描きます。そう、声の高い低いもよく使います。日舞などを習っておくとい、歌舞伎を見なさいと言われるのはそのためです。

落語で喋るのは人間ばかりではありません。動物もよく喋ります。擬人化というやつですね。身近なところでは犬や猫が喋ります。人間になりたいと切に願った犬が、本当に人間になつてしまう噺もあります。

牛や馬も喋ります。狐や狸だつて負けずに喋ります。狸をどう演じたらいいか分からない弟子が方法を師匠に尋ねたそうです。すると師匠は「狸の了見（気持ち）になつてやれ」と言ったとかで、弟子は途方に暮れたそうです。でも一生懸命その了見とやらを想像し、稽古に励んだところ、それらしくなつたそうです。そうです、我々はその動物になつたつもりで演じているのです。

落語は融通無碍です。あなたは天体が喋ると言ったら驚きますか。そうです、あのゴロゴロと鳴る雷が喋るのです。どうです、落語って凄いでしょ。

こんな小咄があります。

お

日様（太陽）とお月様（月）と雷様（雷）が三人連れ立って旅に出ました。ある旅籠（旅館）に宿を取り、

疲れてぐっすり休みました。翌朝、雷様が目を覚ますと、お日様とお月様の姿が見えません。「これこれお女中、お日様とお月様はいかがでしたか？」「はい、お日様とお月様は今朝ほど早くにお立ちになりました」「なに、もう旅立ったのか。なるほど、月日の経つ（立つ）のは早いものじゃなあ」「して雷様、あなたもすぐにお立ちになりますか？」「いや、わしはゆっくり夕立ちにしよう」

雷で夕立。どうです、粋な小咄でしょう。落語の奥深さを分かっていただけたところで、次回からはその動物たちが主人公の噺を紹介してまいります。犬、猫。いや狸か狐か。牛も紹介しましょう。それから学校寄席で人気のあるネタもぜひ紹介したいですね。どうぞ楽しみにお待ちください。